

東日本大震災追悼記念礼拝

良い羊飼

オアシスチャペル 利府キリスト教会 牧師

松田 牧人

わたしは良い羊飼である。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

ヨハネによる福音書 10章 11節

主は羊飼、わたしには何も欠けることがない

詩編 23編 11節

聖書には、勇敢で愛に満ちた羊飼いのイメージが繰り返し登場します。これは、この世界と私たちを造り、導いておられる神を象徴しています。一方で、羊は弱く、愚かで、迷いやすい存在としての人間を表す比喻として描かれます。

あの震災とその後の日々は、聖書が語る「羊飼いと羊」が「神と私」に重なる経験となりました。14年という歳月は、あっという間であり、また長くも感じます。あの日、私は教会の事務所で地震を経験しました。隣接する保育園では、子どもたちと職員の安否確認、保護者への引き渡しから対応が始まりました。電車が止まり、職場から何キロも歩いて迎えに来た保護者が、我が子を抱きしめて涙する姿が忘れられません。

その夜、見たことのない美しい星空の下を不安を抱えながら帰宅しました。家族を落ち着かせ、車の中で一夜を過ごしたことを今でも鮮明に覚えています。翌日から、信徒の安否確認をし、少し経ってからは世界中から支援物資が届くようになりましたので、それを沿岸部の被災地へ届ける活動が始まりました。教会の運営するキャンプ場は国際的な支援拠点となり、最終的に1万5千人以上のボランティアを受け入れることになりました。彼らががれき撤去や泥かきに汗を流してくれる傍ら、私は海外の支援団体との調整や交渉、そして、被災者の方々の声に耳を傾ける日々を送りました。生々しく凄惨な被災経験を聞いた後に「牧師さん、お祈りしてください」と言われて、私は思わず嗚咽し、涙しか出てこないこともありました。

「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」(詩編 23:1)

これは、聖書の中でも最も有名な箇所の一つです。この詩の背景には有名なダビデ王の生涯のストーリーがあり、伝統的にはダビデ王が歌った詩として長年理解され

てきました。彼は羊のイメージにはそぐわない人物です。羊は自分で食物を手に入れたり、外敵から身を守ったりということはできず、また、方向感覚が十分でないのに好奇心があってすぐにどこかに行って迷子になってしまいますと言われますが、ダビデは勇敢かつ聡明で、少年時代は一介の羊飼いでしたが徐々に頭角を表し、偉大な王となる道を切り拓いたのです。ですからむしろ、羊ではなくライオンにでもたとえたほうが良い人物かもしれません。

しかし、神は彼を導き、時にはさまざまな試練を与え、また彼の過ちを通して教訓を与え、彼が本当に気づかなければならない「大切なこと」に気づくよう導かれました。それは「私は弱く愚かな羊である。しかし、勇敢で、慈しみに満ちた羊飼いである神が、私を愛し、導いてくださる」という、神が私たち人間に対して聖書全体を通して一貫して語りかけているメッセージです。

現代社会の中に響いているメッセージは「もっとがんばりなさい」「立派な人になりなさい」というものかもしれません。私たちの心はきっと、いつも「もっと良い〇〇になりなさい」というプレッシャーを感じているのではないのでしょうか。震災後には、日本中に「がんばろう」という言葉がこだましました。私も「がんばらなければ」「自分がなんとかしなければ」と自分を奮い立たせました。「良い牧師」「良い隣人」にならなければ…と。本来、小さく弱い羊にすぎない自分が、背伸びをして「良い羊飼い」を演じる…。かなりの期間、自分のお尻を叩きながら走り続けましたが、そこにはやはり無理がありました。「がんばれば何でもできる」「自分がなんとかしなければ」という思いは傲慢だったと後になって気づかされました。

夜も昼もなく走り続けて 2 年と少しが経過した頃、私の体と心に異変が起こり始めました。毎日続く身体と頭の痛み、酷い喘息、毎晩見る悪夢、不眠、記憶の混乱、突然襲ってくる不安や恐怖、理由なくあふれる涙といった症状が次々に襲いかかってくるようになり、全ての仕事を休んで療養生活をしなければならない状態になりました。「ああ、私はもう元には戻れないんだ。きっと廃人になるんだ」と感じました。長い話を短くしますが、感謝なことに家族や教会員の皆さんをはじめとする周りの方々の温かい支えにより、また、カウンセラーや医師の具体的な手助けもあって、数年がかりで徐々に回復することができました。回復の途上で、いつも繰り返し思い起こさせられたのは、「私が良い〇〇になれるかどうかよりも、神がいつも変わらずに良い羊飼いであられることを思い起こし、その神を信頼すること」の大切さです。

努力はもちろん大切ですが、「すべては自分次第」と思い込むとやがて行き詰まります。大切なのは自分の限界を認め、自分を遥かに超えたお方に信頼し、頼ることではないか…。私はそのように考えるようになり、こんなふうに祈ることを通して少しずつ

心が軽くなるのを感じました。「神様、今日も生かしてくださってありがとうございます。私は自分では何もできない羊に過ぎません。良い羊飼いである神様、どうか今日も私の一步一步を導いてください。」

神様は目に見えません。でも、この目に見えない神様は、羊である私たちが苦しみ、弱り、また、自分勝手な道に迷い出してしまっている姿をご覧になって放って置けないとお考えになり、人となってこの世界にお生まれくださいました。それがイエス・キリストです。そして、このお方は十字架の上で命を捨てることを通して、「あなたを命懸けで愛している羊飼いなる神がいるんだよ」というメッセージを見える形で私たちに示してくださいました。イエス様はこう語られました。

「わたし(イエス)は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(ヨハネ 10:11)

これが聖書の中心メッセージです。私たちが「良い〇〇」になることではなく、良い神、良い羊飼いであるお方が、私たちをどこまでも見捨てず離さない。

私の友人のお兄さんで船越真人さんという方がいます。彼はウクライナで 25 年以上牧師をしておられます。先日も NHK の番組で特集されていましたが、この度の戦争が始まって避難せず現地に留まり、壮絶な状況の中で苦しむ人々に寄り添い続けています。まさに命懸けで尊い働きをされていますが、しかし、彼の言葉の端々には「私は羊飼いではなく、羊に過ぎない」という謙虚さと神に頼る姿勢が現れています。先日届いたメッセージの中にも「この何ともやりきれない状況の中で、真の平和をもたらされる主に頼ることの重要性を改めて教えられています」という一文がありました。

さあ、私たちはどう生きていったら良いでしょうか。震災から 14 年、この間にコロナ禍もありました。先行きの見えない時代です。もう一度「がんばろう!」と自分たちを鼓舞するのも悪くないかもしれませんが、でも私は、今日共に味わった聖書のメッセージを噛み締め、これを握りしめて歩む私たちでありたいと心から願います。「主はわたしの羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」「この良い羊飼いが、良い〇〇になりきれない私をも命懸けで愛してくださっている。」

震災の痛みになお苦しんでいる方々にも、この良い羊飼いなる神様からの慰め、癒し、励まし、導きがあるように心からお祈りします。(2025 年 3 月 11 日)